研究報告

幼児期における身体表現の特徴と援助の視点

鈴木裕子（名古屋柳城短期大学）
西洋子（東洋英和女学院大学）
本山益子（岡崎女子短期大学）
吉川京子（金沢大学）

問題の所在

近年，ひとのコミュニケーションに関する研究領域では，言語による情報伝達はもとより，身体による非言語的な行動の果たす役割についても高い関心が寄せられている。例えばM.Lパターソン[1]は，私たちが身体を使って行う様々な行動を，言語情報に比べてその人の「本当の」人格特性，態度，感情をよく表していると位置づけたうえで，非言語的な行動は言語に比して自発的で嘘偽りがないため，対人過程により強い影響を与え得ると指摘している。このように，人間の相互作用という観点から，非言語的行動の役割を論じる同様の主張は，W.F.R.エンゲル[2]によってもなされている。その他にも，これまではとかく見落とされてきた非言語行動の構造や機能を明らかにしようとする研究は，言語学，文化人類学，心理学，社会学という学問分野の枠を越えた学際的なアプローチをとるようになってきたのである。

一方，学問領域における身体への注目とは別に，高度に情報化された社会での身体のあり方に警鐘を鳴らす指摘も多くなされている。例えば鷲田[3]は，現在の身体の状況をパニック・ボディと名づけ，身体に固有の判断力や想像力が失われ，身体のもつ社会性が消失していることへの危機感を強めている。

また，教育や保育の領域においても，子ども達のコミュニケーション能力の不全に対して，こころと結びついた“からだ”や，主体とその関係のあり方を問う“身体性”という視点から問題を浮かび上がらせることや，その解決策としてノンバーバル・コミュニケーションの必要性や重要性を論議する動きが活発化している。例えば斎藤[4]は，現代の子どもには“他人から何らかのアクションをおこされても，あまり反応（レスポンス）しない「冷めた身体」が目立つ”ことを指摘し，この「冷めた身体」を暖め，「動ける身体」へと変えていくことは，すべての教育の素地であるという考えのもと，子どものからだに積極的に働きかけるプログラムを具体化する営為を重ねている。

筆者らもまた，保育を中心とした教育現場での研究・実践を通して，子ども達の身体活動量そのものの低下[5]や，からだを通してイメージを想起したり，からだを使って動きを工夫するといった身体的な経験の乏しさを実感している。そして，このような教育の現状が，からだとこころのつながりの希薄さを生み，子どもの育ち全般に大きな影響を与えることを憂慮する一方で，保育の現場に，からだとこころの相互作用に配慮した身体表現の活動を積極的に組み込みながら，子どもを豊かに育む教育環境の整備を目指したいと考えている。

さて，保育の領域での身体表現は，かつては「遊戯」と称され，唱歌に合わせて振りをつけた音楽リズム的な内容であった[6]ものが，乳幼児の発達や主体性を重視するという保育全般の柔軟な視点への変化にともなって，身体表現あそびとして幼児教育要領の領域「表現」の中に包摂されるという改定がなされてきた。したがって現在では，保育の領域での身体表現あそびは，子ども達が自分の感性や知性を活かしてイメージを膨らませ，からだを使って動きを工夫し，表現する喜びを味わうことにねらいが置かれている[7]。ここでは，身体の動きに触発されてこころに様々なイメージが浮かんだり，そのイメージから動きが生まれ，またイメージが深化するような“イメージと動きの循環”というこころとからだの響き合いが生じ，その循環を他者と共有することによって，豊かなコミュニケーションが形成されていくのである。このような営みは，言語による表現手段が未分化な幼児期には，最も自然なコミュニケーションの手段になるはずであろう。

一方で，実際の保育現場では，身体表現あそびの展開や指導援助に困難さを感じるという声が多く聞かれる。もとより領域「表現」は，子どもの表現は素朴ながら多様である[8]という理解のもとに，音楽的，造形的，身体的といった形式に分けることなく，子どもが表現に向かう心情を大切に保育活動を展開しようとする保育独自の理念[9]に支えられている。しかしながら，このような“総合性の視点”[10]は，感性，創造性，自己表現を高めるといったねらいとしては充分に理想的であるものの，実際の現場ではそのような抽象的なねらいを達成するための具体的な手立てが形成されているとは言い難い。

特に身体表現あそびについては，先に述べたような時代背景から，現代に生きる子ども達のからだやこころの育ちへの意義や必要性は充分に論議され，その価値は認められてはいるものの，前述した身体表現の特性である“イメージと動きの循環”を促すような活動内容の選定や，身体表現独自の援助法の基盤となる子どもの状況等の基礎的な資料は，現状では著しく不足していると考えられる。

研究目的

本研究では，保育現場で展開される幼児の身体表現あそびにおいて，イメージと動きが生き生きと循環するための活動内容や方法，また，その際の子どもへの援助を具体化するための基礎資料を得ることを目的に，以下の２つの研究を行った。

まず研究Ｉとして，幼児期の身体表現能力の特徴を，イメージと動きという２つの側面から把握するための実証的な検討を試みた。特に本研究では，実験での意志疎通が比較的容易であるという理由から，幼児期の身体表現に関する研究の最初の段階として,5歳児を対象とする表現活動を設定し，そこで得られた結果をもとに，5歳児の身体表現の特徴をモデル化する方向で検討をすすめた。研究Ｉにおいて，実験的な手法による実証的な研究を行った意図は，保育現場での身体表現あそびの展開とその援助を考える基盤として，子どもの身体表現が，特定の年齢でどのような育ちの状況にあるのか，また，イメージと動きとは相互に循環する２つの側面ではあっても，援助に際しての保育者の力点によって，子どもの表現はどのように変化するのかという具体的かつ客観的な資料が重要になると考えたためである。

そして，続く研究Ⅱでは，保育現場での実践事例を分析し，実際の子どもと保育者とのかかわりの中から，身体表現の援助の独自性をとらえることを試みた。その際，研究Ｉで導き出された結果をもとに，特定の視点から子どもと保育者のかかわりや子どもの表現の検討をすすめていった。

研究Ⅱが事例研究という方法をとった理由は，身体による非言語的な表現は，子どもの生活から切り離されたデータとしてのみ収集・検討されるのではなく，それが現われた文脈のなかで理解する意味が極めて大きいと考えたためである。

したがって本研究は，研究ＩとⅡを相互に関連させること，つまりは実験を通しての実証と，実際の保育現場での事例の検討という２つの研究方法の融合を試みることによって，子どもの身体表現の特性から導き出された援助の視点を，再び保育現場に還元し得る知見として洗練させたいという研究意図を特徴とするものである。

研究方法

研究Ｉ＜実験：５歳児の身体表現能力の特徴＞

「動物のいるジャングルに探検に行こう」のテーマをもとに６つの題材を次々に登場させるストーリーをつくり，イメージの側面と動きの側面それぞれを強調する２種類の言葉がけ刺激によって，子ども達の身体表現を促す場面を設定した。その場面をVTR撮影し，「身体表現を捉える観点」に基づいて，それぞれの言葉がけによって，子どもの表現はどのように異なり，どのように変化するのかの検討をすすめた。

①対象：愛知県内私立Ｔ幼稚園５歳児30名（男児15名・女児15名）

②身体表現あそびの題材と言葉がけ刺激の内容

「動物のいるジャングルに探検に行こう」

題材	主な運動
①探検隊	人が歩く
②狭くて暗い道	人が這って進む
③象	象の形態や動き 重々しい感じ
④うさぎ	うさぎの形態や動き 軽快な感じ
⑤へび	へびの形態や動き ぜん動運動
⑥ヘリコプター	ヘリコプターの形態や動き　回る動き

言葉がけの例

さあ　みんな　今日は動物のいるジャングルに探検に行こう
私が　この探検隊の隊長だ　みんな　私の言うことをよーく聞くんだぞ

Aイメージの内容を強調した言葉がけ	B動きの要素を強調した言葉がけ
やや　困った　道がないぞ ここに小さな穴がある この中を進むんだ これは狭いなー　真っ暗だぞ そーっとそーっと進むんだ 狭いなー　暗いなー	やや　困った　道がないぞ ここに　小さな穴がある この中を這っていくしかない できるだけからだを小さくして 頭をぶつけないように 手で地面を触って　頭を下げて 這っていくんだ　小さくなって　小さくなって
たいへん 大きなへびが草むらから出てきました 毒へびかな　大きな大きなへびです こっちに向かってくるよ ゆっくりゆっくりこちらに進んできます きゃー　なんだか噛みつかれそうです	たいへん 大きなへびが草むらから出てきました 太いからだをくねくねさせています 長いからだで地面を這っています くねくね　くねくね あー　大きな口を開けて　噛みつかれそうだ

あー　やっと幼稚園に戻ってきたね　楽しかったね

図１　身体表現表現あそびの題材と言葉がけの内容

表１　身体表現を捉える観点

項　目		具体的な観点	点数　　得点の基準
イメージの側面	イメージの独自さ	他の子どもが思いつかない独自な表現をしている	３：たいへん独特である ２：他の子どもの模倣ではないが一般的である １：他の子どもの模倣である
	イメージの具体化	題材へのイメージを具体的に表現している	３：明確なイメージをもってなりきって表現している ２：イメージを漠然ともってなりきろうとしている １：イメージがもてず，なりきれていない
動きの側面	動きの多様さ	動きの種類	３：３種類以上の動きで表現している ２：２種類の動きで表現している １：１種類以下の動きで表現している
	動きの変化	速度や方向を変化させたり，複合的な動きで表現したり，動きを繰り返したりしている	３：たいへんよくできている ２：まあまあできている １：できていない
	動きの確かさ	表現したいと思う動きを，からだ全体や細部を使って意識的に行っている	３：たいへん意識的にできている ２：まあまあ意識的にできている １：できていない

題材と言葉がけの詳細の一部を図１に示した。題材は，幼児の生活に身近であり，日常の保育のなかで何らかの形で取り上げられていると思われるもの，各題材が異質の動きで表現されると想定され，しかもその動きが５歳児にとって基本的な動きであると予測されるもの，の２つの観点から「探検隊」「狭くて暗い道」「象」「うさぎ」「へび」「ヘリコプター」の６種類とした。

２種類の言葉がけ刺激として『言葉がけＡ：イメージの内容を強調した言葉がけ』,『言葉がけＢ：動きの要素を強調した言葉がけ』を設定した。『言葉がけＡ：イメージの内容を強調した言葉がけ』（以降，言葉がけＡ，またはＡイメージの言葉がけとも称する）とは，感覚や感情の様相やお話の展開を示唆する言語を多く用いた言葉がけであり，『言葉がけＢ：動きの要素を強調した言葉がけ』（以降，言葉がけＢ，またはＢ動きの言葉がけとも称する）とは，身体の部位や動きの様子を表す言語を多く用いた言葉がけである。Ａ，Ｂ両言葉がけに，同一の刺激音を挿入し予めカセットテープに録音した。表現時間は，Ａ，Ｂ言葉がけともに各４分間である。

③実験の手順

日　時：1999年７月８日　７月16日

手続き：言葉がけ刺激Ａ，Ｂのどちらを先に与えるかで身体表現の結果が変わる可能性があるので，順序効果を避けるため，1回目（７／８）と２回目（７／16）はＡ，Ｂ言葉がけの順序を逆にして行った。分析対象とする幼児は，1クラスあたり10名，3クラスで合計30名を予め抽出したが，できるだけ日常の保育活動と同じ状況でないと自然な表現にならないと担当保育者との討議から判断し，1クラス（30名程度）単位で３クラスに対して同様な刺激で実験を行った。探検隊や動物の様子を話し合った後，「探検隊の隊長の命令（テープの声）をよく聞いてやってみよう」と要領が理解できるように説明し，簡単な練習をした後，カセットに録音した刺激を流し，子どもの様子を収録した。収録時に，対象児が他児と重なってみにくいという問題は，対象児に目印をつけ，4台のVTRで収録することで解決を図った。しかし，対象児が他児から影響を受ける状況は否定できない。

④分析の方法

対象児の身体表現を評価するために「身体表現を捉える観点」を設定した。「イメージの側面」として,「イメージの独自さ」「イメージの具体化」の２項目。「動きの側面」として「動きの多様さ」「動きの変化」「動きの確かさ」として３つの項目を設定した。これらの項目は，筆者らが，子ども達の身体表現の実践に関わるなかで，表現をより豊かにするためにイメージと動きそれぞれの側面として観察のなかで捉えて評価できると考えたもの,先行研究等[11)12)13)14)15)16)]でも検討されているもの，の二つの視座から作成したものである。具体的には，6つの題材それぞれに対する身体表現を，表１に示した各項目の観点と基準に従って３段階で評価した。評価者は３名であり，VTR映像の子どもの動きから評価を行った。３名の得点の平均値を対象児の得点とした。言葉がけ刺激の違いによる表現の差異を検討するために，各題材別に，性差，言葉がけの違いによる差，身体表現を捉える観点間の差について分散分析を行いその後に多重比較検定を行った。

次いで，言葉がけ刺激の違いからみた５歳児の身体表現能力を捉えるために，個々に６つの題材別に評価した得点を平均し個人の得点とみなして，分析対象児全員のＡイメージの言葉がけとＢ動きの言葉がけ別の平均値を算出した。さらにt検定を用いて「身体表現を捉える観点」の傾向を両言葉がけ間で比較した。

研究Ⅱ＜実践事例からの援助の視点の検討＞

①対象：愛知県内私立Ｔ幼稚園５歳児であり，研

究Ⅰの対象児を含む。
②対象とした実践：本研究での３つの実践は，保育の一貫として行われたものであり，特定の現象を予測してデータを収集するために意図的に行われたものではない。各実践の対象等の詳細は事例検討の際に記する。なお指導者はすべて筆者である。

結果と考察

1．研究Ⅰ：５歳児の身体表現能力の特徴

（１）言葉がけ刺激の違いによる表現の差異

６つの題材別の，性差，言葉がけの違いによる差，身体表現を捉える観点間の差の分散分析の結果からは，題材「うさぎ」において性別（F（1,280）＝15.632，p＜0.001），題材「狭くて暗い道」において言葉がけの違い（F（1,280）＝18.415，p＜0.001）に有意差が認められた。また，身体表現を捉える観点間はすべての題材で有意差が認められた[17]。

図２は，題材「狭くて暗い道」での対象児の平均点を性別，言葉がけの違い，身体表現を捉える観点別に示した。「狭くて暗い道」では，Ｂ動きの要素を強調した言葉がけ（M＝1.66　SD＝0.48）が，Ａイメージの内容を強調した言葉がけ（M＝1.45　SD＝0.47）よりも平均で0.21点高かった。Ａイメージの言葉がけでは，多くの子が首を起こし体幹を伸ばして同じ方向を向いて床を這っている動きに終始していたのに対して，Ｂ動きの言葉がけでは「できるだけからだを小さくして　頭をぶつけないように　手で地面を触って　頭を下げて」などの身体部位と動作を意識させる言葉によって，這う動きから頭を低くし首をすくめるようにしたり，腹這いになって肘を身体の前方に突き出すようにして前進したり，さらには仰向けになって手で天井を探るような動きへと様々に変化する様子が観察できた。

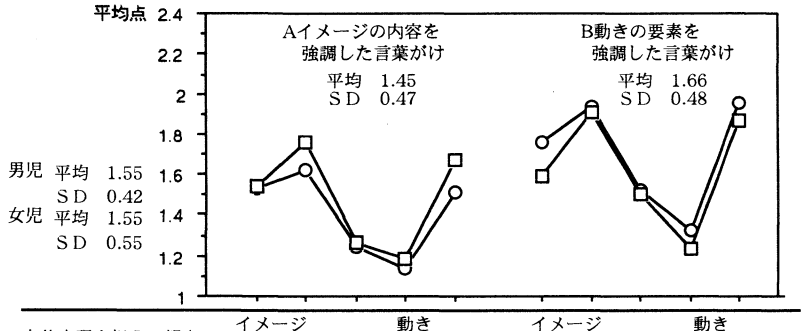
この題材では，象やうさぎのように具体的に模倣できる形態がないため，「狭くて暗い」感じを表現するために，そこを通る人の様子を通して動きを具象化するプロセスが中心となる。そのプロセスのなかで，動きの言葉がけ刺激を受け，子ども達は実際にその動きを試し題材を自らの身体感覚で捉える過程を経て，感覚的なイメージがより具体化し動きが確かになったと考察される。

また身体表現を捉える観点で高い得点を示したのは，男児，女児ともにＢ動きの言葉がけの場合のイメージの具体化と動きの確かさであり，また動きの多様さの得点もＢ動き言葉がけが，Ａイメージの言葉がけより高い得点を示していた。動きの種類が豊富になり，動きが確かになることで，イメージが具体化していくという動きとイメージの相互作用の様相が読み取れる。

これらの結果から，「～になってみよう」，「～を想像して表してみよう」という課題に対して，子ども達が，漠然とした感じから言語で対象の属性を説明するような捉え方に傾いた場合には，身体部位や動作を意識させることで動きを具現化させ，イメージを実感させる作用を促すようなプロセスに導くことが効果的であると示唆された。

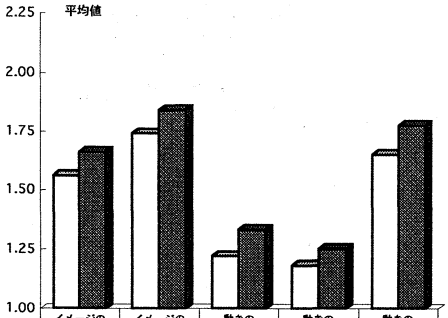
（２）言葉がけ刺激の違いからみた５歳児の身体表現能力

ここでは，5歳児の身体表現能力の特徴について，言葉がけ刺激の違いから考察を進める。Ｂ動きの言葉がけの方が，Ａイメージの言葉がけよりも有意に高値であった。（言葉がけＡ：1.47±049　言葉がけＢ:1.57±0.49　F（4.073）＝22.227　p＜0.01　Mean ± SD）さらに，図３にみられるように，身体表現を捉える観点の５項目すべてにお



身体表現を捉える観点			イメージ		動き			イメージ		動き		
			独自さ	具体化	多様さ	変化	確かさ	独自さ	具体化	多様さ	変化	確かさ
—○—	男児	平均	1.53	1.62	1.25	1.13	1.51	1.76	1.93	1.52	1.32	1.96
		SD	0.34	0.31	0.31	0.23	0.34	0.39	0.44	0.32	0.28	0.30
—□—	女児	平均	1.54	1.76	1.27	1.19	1.67	1.60	1.76	1.27	1.20	1.67
		SD	0.57	0.57	0.51	0.38	0.55	0.50	0.59	0.44	0.32	0.53

図２　題材「狭くて暗い道」の平均点



	イメージの独自さ	イメージの具体化	動きの多様さ	動きの変化	動きの確かさ
Aイメージの言葉がけ	1.56	1.74	1.22	1.18	1.65
B動きの言葉がけ	1.66	1.84	1.33	1.25	1.77

図３　言葉がけ刺激別にみた
「身体表現を捉える観点」の傾向

いて，言葉がけＢが，言葉がけＡよりも１％水準で有意に高いという結果が得られた。

身体表現を捉える観点別にみてみると,「動きの変化」が，Ａ，Ｂの言葉がけ刺激ともに最も低得点であった。「動きの変化」とは，動きの速度の変化，複合的な動きでの表現，リズムパターンをもった動きの繰り返しなどの要素を意識的に行っているかで評価したものである。先行研究[11)12)13)14)15)16)]でも,変化のある動きができることや部分と全身を使った動きができることは,5歳児にとって難度の高い表現方法であるという結果が得られており，今回の結果も概ね同様の傾向が示された。

次いで，それぞれの題材に対して何種類の動きで表現したかを評価した「動きの多様さ」も低得点であった。全児の平均1.28点が示すように，ほとんどの子がひとつの題材を１種類の動きで表現していた。例えば，「うさぎ」という題材で，「両手で頭の上に耳をつくって両足で跳ぶ」運動を繰り返して表現する様子が多くの子に観察された。これらのことから，5歳児にとって，ひとつの題材に対して多様な動きや変化のある動きで表現するという要素は，難しい表現方法であることが示された。しかし，西ら[17)]が，子どもが定型的な身体表現を行う割合は，年齢が進むにつれて高くなるという報告をしているように，この場合も，多様な動きができないというより，定型的な表現を行うことで表現の欲求が充足してしまい，イメージと動きの循環が誘発されにくい状況がつくり出されているように感じられた。

ところが，本実験ではそのような状況でも，動きの要素を強調した言葉がけ刺激を受けることによって，2,3種類の一連の運動や，連続した２種類以上の運動の反復がされるようになり，動く空間が広がったり，リズムパターンが生まれたり，さらに運動がダイナミックになっている子どもの様子を観察することができた。例えば「うさぎ」で,「後ろ足でジャンプ」の言葉を受けて，膝を意識的に曲げて左右交互にリズミカルに飛び跳ね，その後も自分が行った新しい動きを楽しむように，生き生きと繰り返す様子がみられた。また動きの側面で，このような変化がみられると，同時に感じをとらえた表現が生まれ，形式的，概念的な表現が少なくなり，より独自なイメージが動きに表れてくる様子もみられた。例えば「狭くて暗い道」では,「できるだけからだを小さくして」の言葉がけを受けて，実際に自分が小さくなる動きをすることから物語が生まれてきたり，友達と顔を寄せあいながらそっと進むような，なりきって楽しむ様子が見られたのである。

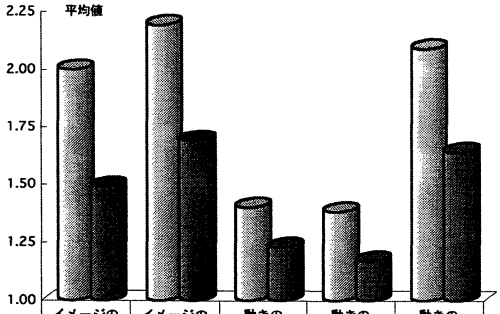
以上の様子は，動きの要素を強調する言葉がけを受けて，子ども達がまず動きを試し，そこで動きを発見し，さらにそのなかで個々の体験からの心象を展開させ，再び動きながらイメージを膨らませていく営みととらえられよう。本実験の対象児は，年長の４月から不定期に身体表現あそびを楽しむ時間を経験しているが，それ以前には，特にこのあそびの時間はもたれておらず，身体表現あそびの経験の少ない５歳児と考えることができる。したがって，少なくとも５歳児の初期段階では，動きの要素を強調する言葉がけを用いた援助が，身体を通してイメージを想起する営みを活性化させる可能性をもつと示唆される。

（３）得点上位群と得点下位群の傾向からみた５歳児の身体表現能力

Ａ，Ｂの言葉がけ刺激による評価の得点が，両刺激ともに全体の平均値を上回った得点を示した子を上位群（男児６名，女児７名），下回った子を下位群（男児７名，女児６名）とした。

Ａ，Ｂの言葉がけの得点を比較したところ，最も大きな差を示したのは上位群男児で，言葉がけＡが1.78点に対して，言葉がけＢでは，1.88点となった。次いで上位群女児で言葉がけＡが1.70点に対して，言葉がけＢでは，1.78点であった。下位群では男女ともに，Ａ，Ｂの言葉がけ間の有意差は認められなかった。上位群の子ども達にとって，動きの要素を強調した言葉がけ刺激が，表現の充実に効果的であったことが示唆された。

さらに，評価観点別にみてみると，図４にみられるように，Ｂ動きの要素を強調した言葉がけの場合の，上位群と下位群の間で平均値の差が大きいのは,「イメージの独自さ」と「イメージの具体化」であった。上位群の子どもたちが，動きの要素を強調した言葉がけによって，得点がより高くなる要因として，動きそのものが確かになるという動きの側面での充実以上に，他の子どもの思いつかない独自な表現をするといった「イメージの独自さ」や，題材へのイメージをより具体的に



	イメージの独自さ	イメージの具体化	動きの多様さ	動きの変化	動きの確かさ
□上位群	2.00	2.19	1.40	1.38	2.09
▨下位群	1.49	1.69	1.23	1.17	1.64

図4　B動きの言葉がけにおける上位群、下位群別の「身体表現を捉える観点」の傾向

してなりきることのできる「イメージの具体化」といったイメージの側面が充実するという興味深い結果がみられた。

2. 研究Ⅰのまとめから研究Ⅱのねらいへ

身体表現をイメージと動きという２つの側面に分割して捉え，相互にどのように作用し合うのかを検討する研究Ⅰでの実験の結果からは,5歳児の身体表現の特徴が以下のようにまとめられ，図５のようにモデル化された。

動きの要素を強調した言葉がけ刺激によって，子ども達は，その動きを試したり繰り返したりして自分なりの動きを発見する。その営みとの相互作用でイメージが具体化する。この双方向の関係が契機となり，次にそのイメージを動きにしていくことで動きが確かになったり，一方で再びイメージが具体化し独自なものになるという循環の図が描かれる。その際，保育者からみて，子どもの表現がより充実してきたと感じられる場面とは，対象へのイメージが具体化し独自さが出ているという印象に依拠するが部分が大きいということも示唆された。

このようなモデルは，幼児の身体表現あそびの方法や内容の選定を考えるための基礎的な資料として有効と考えられるものの，一方で，このような分析的な検討にのみ留まることで，時事刻々と生起する子どもの活動の全体への意識が損なわれ，そのことが，実践の場面において身体表現あそびの援助をむずかしいと感じさせる原因になっているとも考えられる。子どもの表現とは，その現象を見つめれば見つめるほど個別的なものとなり，反面，関係性はより複雑化していくと感じられる。多くの保育者は身体表現あそびを通して一人ひとりの子どもの姿を捉え育てていきたいと願い，そのための判断の根拠を明らかにすることに努めて

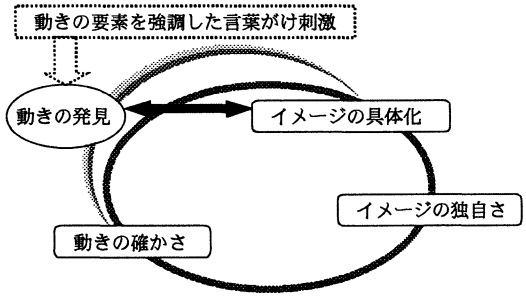


図５　５歳児の身体表現の特徴(研究Ⅰの結果から)

いるが，一方で，目の前で起こる現象は正確に捉えればすべて法則化できるという考えに基づく分析の方向が，かえって関係性への視点を閉ざしているのではないかと思えるのである。

そこで本研究では次段階として，先に示した５歳児の身体表現のモデルを，実践という全体のなかでの様々な局面を事例として抽出し捉え直すことによって，よりダイナミックで有機的なものにしたいと考えたのである。その際，実験Ⅰより導きだされた５歳児の身体表現の特徴のモデルのなかで表現の充実に関係の深い「イメージの独自さ」や「イメージの具体化」という現象に迫り，この２つの観点を切り口として，子どもと保育者の関係性や子ども同士の表現の関係性を検討することで，身体表現の特性に基づく独自の援助の視点という課題に接近できるのではないかと考えた。

3. 研究Ⅱ＜実践事例からの援助の視点の検討＞

以下に，具体的な事例と考察を述べる。

＜事例１＞「洗濯物になって遊ぼう」

実践のねらい：かたちや動きからイメージを膨らませる

こすもす組(男児15　女児15)　1999.6.15

「洗濯機のなかで洗濯物がまわってるよ」という指導者の言葉がけを受けて，皆が遊戯室を走り回るなか，Ｔ男がひとり自転をはじめた。しばらく繰り返すと，次に腹這いになって腹部を支点にして回り続けていた。すると，それをみた2,3人の男児が真似するようにして腹這いになった。Ｙ男は，その様子をみて自分も腹這いになって同じ動きをしようとするが他児のようにうまくできない。それでもＴ男をみながら繰り返し真似しようと試みていた。そのうち，Ｙ男は立ち上がると腰を前に屈めて，両腕を前に伸ばしてゆらゆらと揺らしながら，腹這いで回るＴ男のまわりをＴ男の動きに呼応するかのように，同じような速さで走って回り続けていた。洗濯機の遠心力に振り回される洗濯物のようであった。

＜事例２＞「クルマになって遊ぼう」
実践のねらい：ストーリーを展開させて動く
ゆり組（男児14　女児15）1999.6.15

クルマになって，「走って止まる」という動きを皆で繰り返し楽しんでいるなか，A男も初めから楽しそうに走り回っていた。クルマがバックをする時も，カーブを曲がる時も，ひたすら走ることを楽しんでいた。「次はどうなる？」とか「どんなふう？」といった指導者の問いかけに他児がさまざまに意見を言っても，それには興味がなさそうであった。しかし，「4つのタイヤでピタッと止まってみよう」という課題で走りはじめようとした時，A男は初めて他の子ども達の様子を見回したようであった。N男やM男が，両腕をハンドルのように構えながら走っているのをみると，何かに気づいたようにそれを真似して一緒に走り出した。ピタッと止まる動きでは，N男やM男もA男の様子を伺うようにして同じように両手を床につけて四つん這いになって止まった。その後，指導者が「次は高速道路に行こうよ！」と言葉をかけると，それまで動くことのみを楽しんでいるようにみえたA男が，突然「スピードアップだ！」と叫ぶように早口で言った。「何？」と聞き返すと，立ち上がって，指導者の方に走り寄りながら，「スピードアップしなくちゃ，交通事故にならないように，だよ。料金所を通って･･･」とお話を作りだしたのであった。

事例１のY男の一連の様子から，「イメージの独自さ」は人の真似をすることからも生まれるととらえられた。Y男は，T男のまねをしようするがうまくできない。やってみて，できないということに気づき，そこで自分にできる動きをみつけ，それをすることでイメージが具体化し，自分らしいイメージ（イメージの独自さ）が生まれてきたのである。身体表現は，だれからも見える身体と運動によって行われる活動であるため，人の真似をすることも自分らしさをみつけるための貴重な経験となる。斉藤[19]は，こういった「まねる力」を「他者の身体の動きが自分の動きに移ってくるという間身体的な力」とし，生きる力の基本であると述べているが，身体表現あそびのなかでは，まさにこの営みが，イメージと動きの循環のなかで絶え間なく生じ，それが自己表現の楽しさにつながっているという援助の視点を持たねばならない。

また事例２では，A男が繰り返し動くことによって自分の身体の感覚でイメージを具体化させていたのであるが，その身体感覚が他者の身体から表れた動きに反応し，さらに自分の身体からも送りながらN男やM男らと一緒に動くことを通して，イメージを深化させ独自なものをつくり出したととらえられた。このようにイメージを具体的にし独自さを高めていく過程では，他者とイメージを共有することが不可欠であり，この事例では真似るというからだの動きがその媒体となっている。榎沢[20]が，子どもの身体について，「相互に相手の身体の志向性を感知し，その運動に相乗りすることで志向性を共有し支えあっている。」と述べているように，真似ることは，どちらかが一方的に受けるだけの行為でなく，動きを通して相互に志向する行為の総体である。しかも子どもにとって真似るということは，全く同じ動きをしてなくても同じように動けば充分にこの行為の総体が生み出されるのであり，むしろ同じ動きをさせられるのは，この場合の“真似る”とは異質なものと理解しなければならないと思う。

また，このA男の事例で興味深く感じられたのは，身体の内側に動きやイメージを保持しつつ，他者の動きや言葉などの外側の流れに沿い，自身の感情や感覚を確かにする時間が，独自なイメージを紡ぐのに役立っている点であった。つまり，それは，身体表現が，自身の身体を素材とし動きを媒介とするため，表したものが形に残らないという特性と深く関わっており，“動き”を伴った時間的な経過のなかで，イメージが具体化し，独自さが熟す過程があることを，援助の際には感じていなくてはならないだろう。その“動き”とは，場合によっては動かない状態をも含むという理解が援助の視点を深めるのではないかと思う。

さらに，その過程を支え，イメージと動きの循環を高める要因として，「みなでいっしょに身体を使い，動かすことで，他人の身体に起こっていることを生き生きと感じる[21]」こと，言い換えれば“今，ここで，一緒にする環境”が重要な役割を持つと考えられる。

＜事例３＞「紙になって遊ぼう」
実践のねらい：具象物をみながら多様な動きをみつける
ばら組（男児15　女児15）1999.6.16

K男は，床に落ちたくしゃくしゃにまるまった紙を，座り込んでながめていた。紙を転がしたり，伸ばしてひろげたりして形を変えることを楽しんでいた。この間，他の子どもたちとは直接的には関わらず，ひとりで行っていた。さらに紙を自分のからだに巻きつけたり，頭にのせたりし，やがては，紙の動きを真似するようにして，跳んだり揺れたり，床に滑りこんだりといろいろな動きを試し出した。紙とK男のからだが一体になったかのように自然で個性的な動きと感じられた。

事例３のＫ男の様子からは，身体表現での「独自さ」は身体そのものにあるととらえられた。Ｋ男は，紙のいろんな形を自分で作って観察し，いろいろな形や動きを見たり触ったりして試すことからイメージを想起させている。そして，次には紙の動きを真似しているつもりでも，すでに一人の個性ある身体を通して動きとなった時点で「独自さ」が生まれている。養老[22]は，個性は人間の身体にしかないとし，個性は，真似をしていても自分一人しか持っていないものをギリギリまで詰めていくと，そこに生まれてくるものと述べている。Ｋ男の動きは，まさにその個性を通して独自なイメージとなって表れたと感じられたのである。「この紙はどんなふうかな？」という問いに対する答えを，言葉に置き換えずに身体で受け表すという身体表現あそびの特性から生じる「独自さ」をとらえる視点が，子ども達の自由な表現を認め，自己表現を育むことにつながると思う。また，本事例では，「紙」がＫ男にとって価値のある情報をもたらし，表現する意欲を引き出したという点から，身体と環境との相互作用も見逃せない。ここでは保育者の環境からの援助の重要性が確認された。

４．まとめ

本研究では，実験を通しての実証と，実際の保育現場での事例の検討という２つの研究方法を融合しながら，子どもの身体表現の特性から導き出された援助の視点を模索した。

研究Ⅰの実験からは,5歳児の身体表現能力の特徴として，多様な動きや変化のある動きでの表現方法が難度の高い要素としてとらえられた。しかし，動きの要素を強調した言葉がけによって，動きの側面が豊かになることや，動きの側面以上にイメージの側面が充実するという結果が得られ，それらの結果から図５のようなモデル化を試みた。さらに研究Ⅱでは，イメージの側面の「イメージの独自さ」や「イメージの具体化」を焦点化し，実践事例のなかで現象の分析を行い，子ども同士のかかわり，子どもと保育者のかかわりの中での身体表現独自の援助の視点が，次のようにまとめられた。

・イメージの独自さは，人の動きを真似をすることからも生まれてくる。真似るという行為は，イメージと動きの循環のなかで絶え間なく生じており，自己表現の楽しさにつながる。
・繰り返し動くことによって生まれる個々の身体感覚がイメージを具体的にし，さらに，その身体感覚が他者の身体から表れた動きに反応し，相互に志向して一緒に動きながらイメージを共有する過程を経て，個々のイメージが独自なものになっていく。

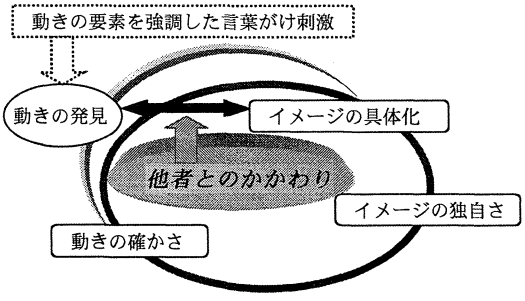


図６　５歳児の身体表現の特徴

・身体の内側に動きやイメージを保持しつつ，他者の動きや言葉などの外側の流れに沿い，自身の感情や感覚を確かにする時間が，イメージを具体的にし独自さを促す。
・独自さは，身体そのものにある。身体そのものを個性と捉えることによって，言葉に置き換えずに身体で表すことが，身体表現の独自さとなる。

加えて“今，ここで，一緒にする環境”や子ども達にさまざまな情報を与える環境，このような環境と身体の相互作用もイメージの具体化やイメージの独自さを促し，イメージと動きの生き生きとした循環のための重要な援助であることが確認された。

以上の研究Ⅱのまとめから，研究Ⅰで導き出されたモデル（図５）に「他者とのかかわり」の要素を加え，改めて図６を示した。「他者とのかかわり」とは，真似ることや一緒に動くことによるイメージの共有，個々の身体そのものが持つ独自性，身体をとりまく環境からの作用といった関係性をみつめる中から生まれた視点を収束する要素として見い出されたものである。身体表現あそびのなかでのイメージと動きの相互作用や循環に深く浸透し互恵的な役割を果たす要素と捉えられよう。

もとより，本研究は“子どもがこうしたら保育者はどうする”といったステレオタイプの援助技術を探ることが目的でなく，身体表現あそびのなかで，子どもの表現をどのように理解するのか，そのために，どのような事象に注目しどのように解釈すればよいのかという基礎的な理念の端緒をとらえたいとの考えで進められた。それは，子ども達の日常生活のなかで，こころとからだを存分に使って自己を発揮する活動として身体表現あそびを位置づけたいという願いに動機づけられている。子どもにとって表現することはあそびそのものであると考えた時，保育者にも子どもの身体から想起されるイメージや動きの揺れる部分に沿うことのできる“柔らかなからだ”[23]が求められる。同時に，子どもの“こころとからだ”の響き合い

を見つめる確かな理念を持つことによって，援助はより柔軟で具体的で方向へと導かれるであろう。

今後は，理念の拡充と合わせて，こころとからだで表すプログラムとしての身体表現あそびの内容や方法を探りながら実践に力を尽くしていきたい。

引用・参考文献

1）M.L パターソン　工藤力監訳　1995　非言語コミュニケーションの基礎理論　誠心書房　pp 1 - 3
2）W.F.R. エンゲル編　本名信行他編訳　1994　ノンバーバル・コミュニケーション　大修館書店
3）鷲田清一　1998　悲鳴をあげる身体　PHP 研究所　P36
4）斉藤力　2001　子どもに伝えたい〈三つの力〉日本放送出版協会　pp172-174
5）鈴木裕子　2001　4 歳女児における身体活動と運動能力に関する研究　名古屋柳城短期大学研究紀要 Vol.23　pp97-108
6）岡田正章・千羽喜代子他編　1997　現代保育用語辞典　フレーベル館　p432
7）柴紘子・柴真理子　1981　動きの表現－想像から創造へ－　星の環会　p92
8）阿部明子・竹林実紀子編　2000　表現　東京書籍　p11
9）黒川建一・小林美実編　1989　保育内容・表現　健帛社　pp 7 - 8
10）大場牧夫　1996　表現原論　萌文書林　p155
11）金子直子・松本富美子・鈴木武文　1998　5～6 歳児における身体表現の特徴と感覚運動能力・創造的能力について　舞踊学 Vol.21　pp14-20
12）古市久子　1995　オノマトペ刺激が幼児の身体表現活動に与える影響について　京都体育学研究第10巻　pp25-34
13）若松美恵子　1990　5 歳児の身体表現力の発達　白梅学園短期大学紀要 Vol.26　pp69-80
14）柴真理子　1982　表現的な動きの発達に関する研究　神戸大学教育学部研究集録68集　p81-95
15）古市久子　1998　幼児におけるダンス模倣の過程について　大阪教育大学紀要第、部門第46巻第 2 号　pp193-206
16）前掲書 9）　第 4 章（3）身体的表現手段の特質　pp38-41
17）鈴木裕子　1999　幼児の身体表現におけるイメージと動きの相互作用　名古屋柳城短期大学研究紀要 Vol.21　pp157-170
18）西洋子・本山益子　1998　幼児期の身体表現の特性 I　保育学研究第36巻第 2 号　p25-38
19）前掲書 4）pp108-109
20）榎沢良彦　1997　園生活における身体の在り方－主体身体の視座からの子どもと保育者の行動の考察－　保育学研究第35巻 2 号　pp42-46
21）前掲書 3）pp70
22）養老孟司　2000　第13回朝日ヤングセッション報告「養老孟司講演会：いまどきの若いものは・・・」朝日新聞社
23）西洋子　2001　保育者と身体性　保育学研究第39巻第 1 号　pp12-19

付記

御協力いただいた名古屋柳城短期大学附属豊田幼稚園の子ども達と先生方，関係者の方々に感謝いたします。なお本研究は科学研究費補助金（課題番号13680074）による研究の一部です。